

いくつもの日本、いくつもの東北。

全国街道交流会議の全国大会「羽州街道・上山大会」が閉幕した。この大会を通して、東北に流れる時の長さ、土地の持つ深さ、空間の広がりを十分に体感した。いくつもの時代のなかで培われてきた風土の上に、数え切れない人の往来と、数え切れない出来事が重なり合い、とても一言では語りつくせない、多様で、複雑な、いくつもの東北がそこに在ることを知った。

幕藩体制の時代、全国諸藩はきわめて多様性＝varietyに富み、その多様性が基盤になり、はじめて近代日本が果たせたのだと思う。諸藩の多様性に富んだ風土、文物、人の往来を支え、それを育ててきたのが街道であった。

くにづくりの基本が、地域の歴史、文化、風土に帰着するとともに、道づくりの基本が「流す」ことから“往来”による「繋ぐ」、「結ぶ」、「響き合う」へと変わりつつある今、街道には真の豊かさとは何か、道とは何かの答えが蔵されているのではないだろうか。

全国諸街道の関係者が、長崎・出島に参集した「街道フォーラム2001」で、街道に刻まれた地域の歴史を学び直すことと、新たな“往来”の必要性が確認されたことが、「全国街道交流会議」結成の契機となった。「道路元標」のある日本橋での旗揚げでは、街道からの“にっぽんルネッサンス”を運動目標に掲げ、続く山口県・萩市で開かれた第1回全国大会では、足下を見つめ直すことから街道ルネッサンス運動を、と「原点認識 足下出発」という吉田松陰の言葉を大会テーマに据えた。静岡県・富士川町の第2回全国大会は、単に古い街道を懐かしみ歴史に理没することなく、歴史を背負い未来を展望しようという思いから、「街道400年、そして未来」をテーマとした。

様々なシーンを経て、山形県上山市に舞台を移した今回の第3回全国大会は、歴史の教科書を書き換えた三内丸山遺跡、奥州藤原氏の栄華、奥羽越列藩同盟に至るまで、西、あるいは南の日本と異なる独自の文化圏を持つ東北を全国に投影しながら、再び地域の多様性と街道の果たす役割について学び、考え、提案することを目的に、「山の向こうのもうひとつの日本」をテーマにした。

果たして、上山大会がねらい通りの展開になったのかどうか、ご参加の皆さんの評価を待つしかないが、全体的に以下のように総括することが出来るのではないだろうか。

第一に、いくつもの《くに》で、いくつもの《ひと》が、いくつもの《知恵》と《力》を出し合って、いくつもの《こと》に果敢に取り組んでいる。

第二に、東北にもいくつもの《時代》があり、いくつもの《往来》と《出会い》があり、それによって育まれたいくつもの《くに》がある。

第三に、土地と人との結びつき、響きあいが地域の基本となる時代、それぞれのローカル・アイデンティティを認め合い、自らの未来を描き実現するため、地域と人の往来を一層盛んにし、新たな文化と地域力を養う必要がある。そのなかで街道の果たしてきた役割を再評価し、これからの役割を再構築する。

さらに、上山大会で俳優の田中邦衛氏が高らかに宣言した「東北の街道宣言」にあったように、上山大会において各人の心に萌した想いを大切にして、「今日、この場所に集う人々自ら、過去と未来を繋ぐ道に一步を標そう」ではないか。

最後に、上山大会の開催にあたり、企画段階から様々な準備、当日の運営まで、多大なる努力を重ねていただいた「上山まちづくり塾」を中心とした実行委員会の皆さまをはじめ、大会に携わった多くの方々に深く感謝を申し上げたい。